

がん教育レポート

がん経験者
の立場から

やわらかい心に響く命の授業を

東大和市立第五中学校

講師：歌手 松田陽子

東京都東大和市の東大和市立第五中学校で10月10日、日本対がん協会の協力で道徳授業地区公開講座「命を考える教室+がん教育」が開催された。

当日は特別支援学級を含む全クラスでまず道徳の授業で各担任ががんについて教え、その後シンガー・ソングライターでが

ん経験者の松田陽子さんの講演会を聴くという2時限構成。

各クラスでは学年毎の学習指導要領に沿った各種教材の中から担任が教材を選び、工夫を凝らした授業を行った。中にはタレントの北斗晶さんが自身の乳がん手術のことを公開したときのブログの文章を教材にするクラスもあった。



生徒の質問に答える松田さん

続いて生徒約260人と保護者が体育館に集まり、松田さんの講演会を聴講した。松田さんは若くして子宮頸がんになり、うつ病も併発した経験を持つ。その苦しみを克服して今は国連UNHCR広報委員として世界の難民支援や児童虐待防止、自身の経験を生かした子宮頸がん検診の啓発活動などに飛び回っている。

松田さんが自身の生い立ちや、がんにかかりつらかった日々を語る言葉は説得力があり、スリムな体に似合わないパワーと気さくな語り口ですぐに子どもたちの心をとらえた。

講演会の後は30名以上の保護者が車座になって意見交換会を行った。中にはがんに経験した人もいて、ふだん言えないつらさを涙ながらに語る場面もあった。

同校も以前は荒れていた時期があり、山本武校長は「外の空気を入れ、注目されることで生徒たちに自信を持たせたくて、着任以来さまざまなイベントや活動を積極的に実施してきました」と話す。今回の公開講座でも、みずから教材を作成する熱心さだった。

高校生の心に届くがん教育を模索

千葉県立九十九里高校

講師：山王病院副院長 奥仲哲弥

11月9日、千葉県立九十九里高校でがん教育のモデル授業が開催された。今回の授業は保健講話としてがんの教育を計画していた千葉県東金市の山武健康福祉センターから相談を受けて、日本対がん協会が企画協力して実現した。

講師は禁煙教育でも精力的に活動している山王病院副院長の奥仲哲弥先生。「十代からのがん予防 九十九里高校篇」と題して3年生全員の143人に向けて講演を行った。

事前にアンケートをした結果、親など同居者に喫煙者が多く、たばこの害についての認識が低いことが分かったこともあり、講義では一般的ながん予防に加えてたばこの害についてもくわしく話した。

奥仲先生はクイズ形式でがんの基礎知識や、治療の種類、がん治療のオーダーメイド化が進んでいること、身体にやさしい抗がん剤も開発されつつあることなどをわかりやすく解説。専門である外科手術についても、低侵襲

化が進んでおり、出血量もかつての800ccから今は50cc程度に減っていることを説明すると、生徒から驚きの声がかかれた。手術動画を映した時の反応が一番大きかった。

たばこの害については、奥仲先生の専門である肺がんの約半数の原因が喫煙であること、喫煙者の手術は肺が癒着していてカメラが入らないなど非常に手術が難しくなることなど、具体的な例を挙げての説明に生徒たちも聞き入っていた。加えて九十九里高校では卒業後就職する生徒が多いこともあり、喫煙者を採用しない企業が増えつつあることにも触れた。

講演の後に開かれた懇談会には、地元山武地域の教育委員や保健師、近隣高校の養護教諭や保健体育教諭、日本対がん協会グループ千葉県支部などが参加し、意見交換を行った。参加者からは「がんの予防教育はやりたいが、どうしたらよいかかわからない。やはり専門家に話して

もらうのが一番だと思った」「小学生ではたばこ教育を素直に聞くがすぐ忘れる。高校ぐらいでもう一度やった方が良い」などの感想や意見が出た。

奥仲先生は「配慮の問題が良く言われるが子どもは強いし、テレビなどの過激な情報にさらされている。手術シーンは集中力を保つためにも長めに入れた」「以前、中学の文化祭で健康について調べ学習を発表した後のタイミングで講演をしたときは、とても反応が良かった」など色々な工夫や参考になる取り組みを紹介していた。

当日の授業の様子は千葉テレビや千葉日報などで紹介された。



クイズに答える生徒たち